
限定！専属！契約？膝まくら社員。

森永パピ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

限定！専属！契約？膝まくら社員。

【Nコード】

N8770V

【作者名】

森永パピ子

【あらすじ】

倉橋冴子二十五歳。頭の中はただれているけど仕事は頑張る営業課の一社員。上司の瀬川淳平（恋人有）に部下としても女としてもくびったけ！彼を思うあまり、咄嗟に提案した癒し技が思わぬ功をなして……？

暴走系思考回路ピッチお馬鹿女と、仕事は敏腕。恋愛ヘタレ男の微妙なラブストーリー。

短編『次行きましょう次！』から増長した連載。成分は大体同じで

すが、手作業の為、若干品質が異なります。別物としてお楽しみ下さい。暇つぶしになれば幸いです。

一話

短大を卒業し、契約社員というフリーターを経て、中小企業の建設会社に就職して早三年。石の上にも三年とあるように、ようやくこの営業課での仕事に慣れてきた。倉橋冴子二十五歳。今日は私が掴んだお客様との商談があり、上司と一緒に挨拶に行く予定。

「おはようございまーす」

「倉橋！ 最終見積書と契約書確認できとーとや？！」

携帯を左手で伏せ、大声を出した男、私の上司にあたる瀬川淳平は、上層部に敵がいるというほど仕事熱心で、部下思いで、背も高くてガタイもいい、男前だ。

「もちろんです」

昨夜の時代劇アワードを犠牲にして作り上げた書類を、バックから出して見せる。

「おっけ！ あ、すみません！ では、本日の二時にお伺いしますの。はい。はい」

電話を切つて、椅子にかけた上着をとると、瀬川さんは大股でこちらに向つてきた。

「よっしゃ、倉橋行くぜ！ 一億五千万のビル、よう取った」

すれ違い様に肩をぽんと叩かれる。たったこれだけで私は連日の徹夜の疲れも忘れてしまう。

今日はバリツと仕事モードだ、ぬうう！ 漲る！

私が入社して間もない頃。商談相手の藤田一美氏は南区界隈の結構な資産家で、氏の邸宅の改築工事を瀬川さんに紹介され、言われるままお伺いしたものの、当然相手にされなかった。

初日は文字通り門前払いで藤田氏本人に水を撒かれた。それでも初めて任された仕事だったので、話を聞いてもらうために通いつめるしかなかった。

「おまえみたいな新人じゃ話にならん！ 瀬川を連れて来い！！」
と怒鳴り飛ばされても、菓子折りを持つて一人で行った。

藤田さんは私からではなく、新人だからと言った。
尚更、勉強させてくださいと必死に頭を下げた。

「気難しい人やけど、誠心誠意おまえが頑張れば絶対応えてくれるし、可愛がつてくれる人やけん。絶対諦めんなよ。あん人に認められてこい。俺はおまえば信じとるけんな」

紹介してくれるときに、瀬川さんは言った。

水を撒かれたりしたのは一度や二度じゃないが、初めて水をぶっかけられた日は流石に凹んだ。

一旦家に帰って着替えて社に戻ると、ちょうど瀬川さんも書類を取りに戻っていて、私のスーツが変わっているのに気づいて、自分も同じ経験をしたと笑った。こんなふうに笑える日がくるなら、大丈夫だと思えた。

その夜、瀬川さんと初めて飲みに行き、今まで出会った色々な人の話を聞かせてくれたが、どんな仕打ちを受けても、誰ひとり出会ってきた人たちを悪く言わなかった。

「やっぱ、女ん子には辛かろうかね？」

困ったような笑顔をさせてしまったので、つい啖呵を切った。

「絶対取ります！！ 女だから無理って思われるなら、女と見てもらわなくて結構です！」

鼻息の荒い私を瀬川さんは親兄弟のような優しい笑顔で褒めてくれた。そして藤田さんが都合のいい土曜日を教えてくれた。

当時は知らなかったけれど、私と行き違いに様子をうかがってくれていたらしい。契約を結んだ日に藤田さんが教えてくれたので事実だと思う。

教えられた土曜日に菓子折りを持つていった日には糖尿にさせる気かと詰られたが、藤田夫人が嬉しそうに受け取ってくれた。夫人にお菓子を受け取ってもらったただけなのに、震えるほど嬉しかった。

一ヶ月目によく玄関に招かれて挨拶し、二ヶ月目には書類を受け取ってもらえた。

「泣いて逃げるかと思っとなに強情な奴やな」としぶしぶうちの会社の提案に印鑑を押して貰えたとき、初めて目が潤んだ。でも絶対涙は見せないと決めていたので、大声でお礼を述べて、平伏で誤魔化した。

瀬川さんの顔を立てるために承諾してもらったようなものだったが、私も瀬川さんの顔を潰す訳にはいかなかった。私は意地を通せたのだ。

と、まあ純粋な時は過ぎ、今では水をぶっかけられようが、酔っ払ったおっさんに太ももを撫でられようが、へらへら笑ってかわせるふてぶてしさが身についた。

おかげさまで面の皮が当方比二百パーセントですよ。

「おまえってほんとへこたれん奴やね」

私が助手席に座るなり瀬川さんは言った。

「仕事で女だからって舐められたら悔しいですから、ってなんですか藪から棒に」

ふんつと鼻息を荒くしてみせる、が、運転中の彼はこっちは見えない。

「おもしれえ。怒るやろうけど、おまえいい女やと思うぜ」

何気ない感想のつもりだろうが、私は女心の秘孔を突かれっぱなしだ。私はもう、死んでいる。聴覚まで性感帯にする気か？

「はああ？ そんなこといわれなくなつてちゃんと仕事取ってきてますけど?!」

「いやいや、そやないつて。ただ、かけえつて思ったけん言っただけやん、怒るな」

瀬川さんは前を見たまま笑う。怒ってるんじゃない、照れているだけだ。仕事モードのあんたもカッコいいよ。たまらん。笑顔だけ

で唾液腺が活発さ！

「別に怒ってませんけど。あ、菓子折り、十六区のダグワーズ買ってます」

「あー、あそこの奥さんそれ好きやもんね」

「はい。お客様のご要望ですから」

『お父さんが契約したらアレ買って来てね』と屈託なく笑う奥方の顔を思い浮かべる。もうマジ奥様可愛いよ奥様。きゅんきゅん。

「俺も買ったっちゃけど、後で会社の皆に配るか」

「女子社員が喜びますよ」

「おまえ食うなら食ってもいいぜ」

「じゃあ後で皆と頂きます」

「おう」

甘いものがそんなにいけない花の二十五歳。萎れとるわけやない！ スイートセブンティーンの頃からぞ！

車は大通りを抜け、入り組んだ路地を進み住宅街に入った。目的地の邸宅の大谷石の塀に囲まれた門をくぐり、車を停めた。

バッグから菓子折りを持って車から降りると、淡い藤色のカットソーに白いストラップスを穿いた年配女性が家庭菜園のゴーヤの陰から顔を出した。その手には軍手と剪定鋏。

「おはようございます！ 奥様。緑のカーテン伸びてきましたね」

「あら。さえちゃんいらっしやい。よう来たね。お父さん待つとるとよ」

「本当ですか！ 朝早くからありがとうございます」

「おばちゃんたち朝早かけんね。こんくらいがちょうどいいと」

「そう仰っていたいただけると助かります。これ、よかつたらお召し上がり下さい」

「あらあ。私これ好いとるっちゃんねえ。ありがとう」

後ろから歩いてきた瀬川さんも挨拶をする。

「今日は鬼軍曹も一緒とね。気が休まらんねえ」

「奥さん。俺も一応人の子ですよ」

藤田夫人はコロコロと笑い、私たちを招いてくれた。

藤田さんに最終見積りと契約書を確認してもらい、署名と印鑑が押される。この瞬間っ！コレが醍醐味！ 疼く達成感を足の痺れと共に我慢する。

「こいつは黙らせてやらんとしえからしいけんな」

黒檀の机を挟んで瀬川さんに言う。瀬川さんは快活に笑うと、せからしい部下の非礼を詫びた。私も頭を下げた。ごめんな！ 執念深くても、さそり座やないとぜ！

「それにしても藤田さんのおかげでようやくコイツも使いもんになつてきました。私のときといい、本当に感謝してもきれません」

「言うようになったな。瀬川。この嬢ちゃんの鼻っ柱の強かとは貴様の教育やる？」

「お褒めに預かり光栄です。おかげさまでいい部下になりつつあります」

「ふん。この嬢ちゃんの根性が座つとつたけんたい。ほら、持つてけ」

お礼を言つて差し出された書類を瀬川さんが受け取るうとすると、かわされた。

「なんでおまえが受け取るとや。コレは嬢ちゃんのやるが」

藤田さんは嬉しそうに悪い笑顔を浮かべる。このおっさん、大好き。瀬川さんも膝を打つて笑った。

「ありがとうございます！！」

前のめりで頭を下げると、机の縁に額を思い切りぶつけてしまった。鈍い音が静かな和室に響いた。

「そそっかしい女子やな！！」

額を押さえながら苦笑する私を見て、藤田さんは大口をあけて笑っている。

「おま、馬鹿！ 気をつけろ」

「すんまつせん」

瀬川さんに肩を支えられなんとか上体を起こす。ああああ。肩が

蕩ける、生チヨコばりに手の体温で融ける！

「静子！ 静子！ 嬢ちゃんが机の角で頭ぶつけたけん、なんか冷やすもん持ってきてちゃれ！」

藤田さんの言葉に、少しはなれたところから夫人の驚愕する声が返ってきた。

「さえちゃん大丈夫とね?!」

ガーゼに包んだ保冷剤を受け取り、頭を下げた。痛みより恥ずかしいんだぜ！

「お手を煩わせてしまつて、本当に申し訳ありません」

「なんいいよるとね。切れとらんね？ 痛かる？ 大丈夫？ 冷やしとき」

「はい。丈夫なだけが取り得ですから」

「もー、気をつけりいよ。ちよつと淳ちゃん、なんしよう。ボサつとしとらんで早よ病院連れてつてやり」

お姫様抱っこブリーズ！ まあ、この後も挨拶回りで瀬川さんは忙しいけん無理ですが！

「は、はい。じゃあ、私たちはこれで失礼します。お騒がせして本当に申し訳ありませんでした」

「嬢ちゃん気をつけんといかんぞ」

「はい。申し訳ありませんでした」

瀬川さんと私は、藤田夫妻に頭を下げ、邸を後にした。

「大丈夫とや？ シート倒して横になつとけ。会社の前で降ろしちやあけん」

車に乗り込むと瀬川さんが心配そうに私を覗き込む。

「すんまつせん」

「赤うなつとうやんか、よう冷やしとけよ」

恋の実も真つ赤に熟れてますけど、お一ついかかですか、旦那。つて言えねえけどな!!

熟れた恋心炸裂の一步手前。車内に置きっぱなしになっていた瀬

川さんの個人携帯電話が鳴った。

ハンドルから右手を離し、ダッシュボードの携帯を耳に当てた。

「おう、どうした？ 俺今運転中っちゃけど。ああ、今日？ すま
んばってん無理やね。帰るの遅くなるやろうし……。しゃあなかる
うもん、仕事っちゃけん。鍵あるっちゃろ？ 来るなら来とって
いぜ。もう切るけん。じゃあな。おう」

言葉は素っ気ないけれど声は優しい。申し訳なさそうに眉を下げ、
電話を切る。

私の熟れた恋心は急速凍結し、くしゃくしゃに縮んだ。合鍵渡し
てんだなあ。幼通い妻やんか、エロス！ いいなあ。私なんか帰っ
たって一人。待ってる人も待つ人もいない。

「すまん」

ちらつとこちらに黒目を向けて唇で苦笑する。

「いえいえ！ 例の彼女さんでしょ？」

「うん。まだ学生気分が抜けきつとらんのが困り所やね」

とは言うが、本気で困っているようには見えない。そういうところも可愛いと
思っているんだろうな。いいな。でも私は丈夫なのが取り得。お得意様も
お墨付き。瀬川さんもそういうところを買ってくれているはず。

「仕方ないやないですか。彼女二十歳でしたっけ」

「そうそう。先月二十歳になったばかりか。はじめ見た目はおまえと
同じぐらいかと思いきや、たっっちゃけどね」

「付き合い始めて半年でしたっけ」

「うん。そう」

ああ、もうこの話はしたくない。なのに、急に切り上げたら怪しまれ
そうで素知らぬ振りが続けてしまう。もし、この気持ちがあればたら
仕事に支障をきたす。瀬川さんは割り切れそうだけど、私には無理だ。

今でも、顔が見れなくて窓の外に視線が逃げている。

「ま、俺の話はどげんでもよかばってんが、今日どこ行くや？ 波

「多も先週二億の契約とつてきたけん皆で飯食い行こうや」

「え、でも、彼女……」

「馬鹿。誰が俺の仕事支えてくれよるとや。おまえ達優秀な部下やる。一億はもう部長が押さえとるし、まあ後の五億五千万は半年以内に俺が取ってくるけん任せとけ」

「くそう、惚れ直す。昨日クリーニングから返つてきたばかりのスラックスが指の間で皺になる。」

「でももう今年のノルマ九億九千万は目前やないですか」

「そうたい！　すごかろうが。まあ、ぶっちゃけ、六億は取れる確信はある」

「マジっすか！　そしたら来年のノルマさらに上がりますね」

「上がるうと下がるうとやるしかないやろうもん」

「はい！」

「頼もしい部下で助かるわ」

瀬川さんが嬉しそうな顔をするややる気が出る。頑張つてよかつたつて思う。女として支えられないなら、せめて部下として。

「大物ゲットしたし、後はフォローに回ります。瀬川さん今から西区ですか？」

「あー、飯食つて、二時からパインホームの新妻さんとこ行く」

「じゃあ、私早良区の宮島ガスさんとこ挨拶いってきます」

「そうや、なら昼飯行こうや。宮島さんとこまで送っちゃうるついでにリンガーハットでちゃんぽん食おうぜ」

「いいですね！」

私が恋人だったら両方から支えるのに。女としてみてもらえなくていいなんていった自分が恨めしい。でも、今更何をいっても遅い。前向け私。恋人より仕事が最優先事項の彼の近くにいる。それで充分だ。

二話

「ああ……、疲れた」

冷たいおしぼりで思い切り顔を拭きたい願望を堪えながら装飾したばかりの手先を拭う。

ホットペッパーで見つけたネイルサロンで久しぶりに塗りなおしたカルジエルは控えめなピンクのグラデーションで、中指に小さなラインストーンが乗っている。目の前で顔をゴツシゴシ拭っている波多にでも見て見てとつき立ててやるうか。

今日は大型チェーン展開の居酒屋で飲んでいる。個室っぽく区切られたテーブル席にBGMはジャズ。しっぽり大人の空間を無視するのは、隣の大学生。一気飲みコールが多彩すぎて仲間に入れて欲しい。

結局、瀬川さんはお客様に呼び出されて中洲に行ってしまった。

メンバーは同僚で私並みに瀬川信者の波多博人二十六歳と可愛すぎる事務員の鮎川沙奈二十三歳。波多のせいで最近、瀬川さんと同行する機会ががつつり減った。

「倉はっさん、なんか今日暗くない？」

注文を聞きにきた学生のバイトにとりあえず生二杯とカシスオレンジを注文し、つきだしの切干大根をつまんだ箸で波多は私を指す。

「はあ？ 別に普通やろうもん」

「いやいやいや。今日の倉はっさんは違う。部長よりでかい仕事取ったと何か暗い。ねえ、あゆちゃん、そう思わん？」

私の隣に座っている鮎川ちゃんに同意を求める。その鼻の下は伸びっぱなしだ。私には狼藉三昧のくせに。こいつ、『ミートボールぼん！』って言いながら鼻フックしてやりたい。瀬川さんと飲めるからって浮かれるのはお前だけじゃないってこった！

「そおかいな？ 倉橋さんいつも通りカッコいいけどなあ。できる女って感じで超ウラヤマシー」

どや！ あゆりんのハートは私に釘付け！ むんと鼻を高く持ち上げて波多に見せつけると、ちょうど飲み物が運ばれてきた。はい、終了。私のドヤ顔はビールに負けた。

「じゃ、瀬川係長から預かった三万円でノルマ達成祈願の乾杯！」
ガチコンとジョッキをぶつけ合う私と波多に遅れて鮎川ちゃんがグラスを控えめにぶつけた。

ちん！ 正真正銘のカワイイ系女子は、発する擬音も違っただけだ。

ちん！ 語尾に『こ』ってつきたい。ぽっくんは歩く身代金世代としては。

「っかー……。うま」

「ぶるあああ！ やっぱ生ビールやね！ なあ！ 倉はっさんよ！」
「そやね！ うっう、たまらんね！」

私と波多が仁義なきオヤジっぷりを余すところなく発揮している脇で、鮎川ちゃんは口元を手で覆って、くふふ。と笑っている。くふふ。爪の垢、煎じたい。

「あーあ。今頃瀬川さん、中洲かあ。俺隣に座って接待したい」

「きんもー。おかまバーの面接受けて来い」

「やーね。違っんよ。倉はっさん、瀬川さんのトーク聞いたことないと？ マジ面白いんぞ」

「しっとなる。お前より部下歴長いんぞ」

波多のキモい瀬川トークは排除して、おしながきを開いて何にしようか考える。

「厚揚げ、から揚げ、チャンジャクリームチーズも捨てがたい……」

「全部頼めばよかるもん。俺焼き鳥！」

「えええ。私サラダが……」

消え入りそくなあゆちゃんの声をピクアップしてサラダのペー
ジを開いた。

「あっ。サラダね！ 蒸し鶏の中華風サラダとかは？」

「シーザーサラダがいいですっ……」

「おついいねえ。さすが鮎川ちゃん。チヨイスがどつかのオツサン舌と大違い」

ああ！？ ブルトウス 波多、おまえもか！！ シーザー違いは承知の上。たんぱく質と脂質を求める肉食系の私には衝撃だった。こ、これが、ウサギちゃんってやつか……。

私が「寂しいと死んじゃうんだ・ゾ！」とかいった日にや、「あー？ 欲求不満で？ ってか、死ね」と耳をかきながら、あるいは鼻をほじられながら聞き流されそうだが、あゆりんが涙目で言った日にや「俺がいなくちゃコ・イ・ツううう！ 守ってあ・げ・た・い」ってなる！！

見た目だけじゃなくて中身大事。食欲性欲睡眠欲がメインの女じやいかん！！

「アタシ、脂っこいものちよつと苦手なんよね……あ。でも、ミスドとかはパクパク食べちゃう。だけん痩せんとよねえ」

えへへ。申し訳なさそうに鮎川ちゃんが笑う。可憐ってコレか。

パクパクね。パクパク！ パク・ヨンハ！ 私がくだらない思考回路を巡らせている間に、鮎川ちゃんはオークラのランチとケーキバイキングの話が始めていた。待つて待つておいてかないで！

「ケーキとかそんな食えん。女の子って甘いもんよう食うよね」

「えー、だつて甘いものは別腹だよね！？ 倉橋さん！」

へっ！？ 私はそんなに食わんよ！？ 食つても二個。それでラーメン屋に行きたくなる。高校生の時に一度ケーキバイキングに行った事があるけれど二度と行きたくない。

とは言えず。

「あー……まあ、ねえ。食べちゃうわー」

「嘘こけ。倉はっさんならケーキバイキングよりスタミナ太郎やるうもん」

「お前つ貴様きさまつ！ 私をなんと思つとーとや！」

「おっさん。マジ博多のおっさん。フツー若い子が『おまえきさん』とか言わんやろ」

波多はひゃっひゃと笑い、呼出しボタンを押した。

確かに言われてみればそうだ。

お父さんの口調そっくりだと母にも妹にも言われる。

レディースセットとかいう細々（こまごま）した食べ物とか、オシヤレなカフェランチの気取った少量プレートなんかぼったくりだと思っっているし、そんなのが大好きな妹を鼻で笑っている。同じように妹もラーメン屋で酒が呑める私を女じゃないと罵るけれど。しかし、実は憧れている。デザートをスイーツと平気で言えて、可愛いは正義！を体言している女に。一応、小さい頃から家事を手伝わされていたので特技は料理なのだが、三人ほどいた歴代彼氏の反応は、まあひどいものだった。こっぴどかしいので公にはしない。甘いものも苦手だけど、私だって可愛い女と思われたい！モテカワとかやりたいんだ！

「えーつと、生中と串焼きセットと……、倉はっさん、なん頼む？生でいい？」

心の声は届かない。そうよね。え？注文？店員さんがエアコンのリモコンみたいな機械を手に、ニコニコ笑っている。

「いや！黒霧水割り！あとチャンジャククリームチーズと揚げ出し豆腐！」

「あと、シーザーサラダとカシスオレンジ下さい」

反射的にチヨイスしたものの、鮎川ちゃんとの違いに泣けてきた。笑えすぎて。

三話

宴もたけなわ。気づいたら日付が変わっていた。週の始まりに大冒険しているわけだが、まだ若いから大丈夫と信じたい。

波多と鮎川ちゃんと店の前で別れた。一応波多は心配して駅まで一緒にと言ってくれたが断った。

地下鉄薬院大通り駅から家までなら歩いて約三十分。いろいろ押し問答しているうちに最終奥義である深夜バスさえ逃してしまいうなので、とつとと駅に向かうことにした。

波多はたぶん鮎川ちゃんを狙っているのだろうと察して、後は若い者に任せてやるうという私の老婆心だ。幸い通りには、通行人もいるし、駅も目の前。全然余裕だ。しんぱーいないさー！

ポータスで購入した靴を鳴らしながら橋の近くの交差点を歩いていると、映画『プリティウーマン』の主題歌が流れてきた。大人になったなあとか脈絡もない事を考えているとバッグの中からの着信音だった。メルシー！（巻き舌三昧）

携帯電話をとると、ディスプレイに『瀬川さん』の表示。ボタンがへこむんじゃないかという勢いで押し、耳に当てる。

「もも、もも、もしもし！！」

「も、言い過ぎやるおまえ」

電話越しに聞える笑いを含んだ低い声。なんだか暖かくて耳がくすぐりたい。

「え。そんなこという為に電話してきたんですか。こんな夜更けにちかっぱ暇人やないですか」

われながらどうでもいい減らず口だとわかっている。

「ああ？ 違うつたい。俺も珍しく早めに終わったけん合流しようかと思つてあいつにかけたら、終わつておまえ一人で帰りよるってきいたけん電話したつたい。家着いたとや？」

ハアアア？ なんそれ。マジ、胸がきゅんきゅん。

「今さつき別れたばつかです」

「はあ?! 終バスなかるうもん! おまえ歩いて帰るつもりや?」
「大丈夫ですよ。近いし、歩いて三十分ちよいですもん。腹ごなしにもなります」

「馬鹿! 危なかるうが! 俺今タクシーで天神やけん待つとけ」
「え、でも、瀬川さんたしか大濠でしょ? 方向ちよつと違うやないですか」

「やかましい!! そげなんどうでもいいいたい。いいけん待つとけ! おいちゃん、ごめんけどやっぱ薬院いつてくれん? あ、もしもし? おまえストアの前辺りで待つとけよ?」

「はいはいわかりました」
いい終わらないうちに電話が切れた。会社の飲み会でもタクシー乗り合いして最後に降りてたもんな、この人。

え、なにこれ。さつそく送り狼フラグ? よーしよし、だりやしやしゃしゃこいこい! ムツゴロウも驚きの猛獣使いつぷりみせてやんよ! 噛まれるのは目に見えてるけどな! 私の部屋で真夜中と夜明けのコーヒー、むしろ私をご馳走しちゃうパターン?

はいはい、ないない。瀬川さんには可愛い年下の彼女がいる。
再びプリティーマンが鳴り、携帯電話を見る。『波多坊』おまえか。

「もすもーす!」

「まりもつこりー! 家着いたん? おれ着いたー」

私もだけどコイツもたいがいやな。終話ボタンを連打してやろうかとさえ思う。

「ああそう。よかったな。こっちはまだやけど」

「マジでー! そこら辺におる男襲うなよ」

「きさん、たいがいにしとけよ。瀬川さんが帰りに拾ってくれるって言いようけん心配すんな」

「はああ?! なんで倉はっさんがそんなVIP待遇なん!」

「瀬川さんから早めに終わったけんって連絡なかった?」

「あー、あつた。もうちょっと待つときゃよかつた」

「いいやん。あゆりん送つてやつたぢやろ？」

「じゃあないやん。方向一緒やつたし」

「優しい波多くんアピールできたんやろ？ いいやんか」

「んーまあね。倉はっさんの食欲ありえんとか言いよつたぜ。アタシ無理ーって」

甲高い声で鮎川ちゃんの声真似らしきことをした。ウザイ声出さなや。

「あつそ。すんまつせんね。大食漢で」

照明の消えたストアの前にはタクシーが列を成している。着飾つた女の子や、ミニチャリにのつた古着マスターのお兄ちゃんとか、ヒップホップ好きですけど、なにか？ みたいな二人組みなんかがちらほらいる。波多としようもない話をしていると、渡辺通りの方角からタクシーがこちらに向つてくるのが見えた。

「じゃあ、私は瀬川さんと合流しますから。波多坊は悔し涙で枕を濡らしながらおやすみなさい。いい夢見ろよ。歯あ磨けよ」

「おまえは一人ドリフか。くっそー俺もいこうかな」

「馬鹿。ついでに送つてもらうだけたい！」

「えー怪しかねー。おまえ、もしかして瀬川さんと……」

「あんた瀬川さんに彼女がおるの知つとるやろ」

「は？ まだ続いとると？ 女子大生。マジあの人女見る目だけはないな！」

「えつらそーに」

本当は声を大にして波多に同意したかった。しかし、タクシーが目前に停まり中から瀬川さんが軽く手を上げたので、適当に電話を切り上げた。

「おつかれ。電話大丈夫とや？」

「お疲れ様です。波多くんからだつたんで大丈夫です」

私が車に乗り込むと、瀬川さんが行き先を告げ、

「あ、波多ね。なーんおまえら付き合いよーとや？！ 若いもんは

うらやましーのお」

発進するなり下世話な口調で訊いてきた。酔っ払い丸出しやんか、おっさん！

「いやいや、波多くんは鮎川ちゃん狙いですから」

十歳近く年下の彼女がいるくせになにをほざくか。

「おまえ彼氏おらんと？」

好きな人はいますけどね。隣に！！くっそ。バーカバーカ！

「就職して以来いませんけど、なにか？」

心の声は置いといて、私は淡々と答える。

「もったいなかねえ。おまえいい女やとに」

何度恋の坩堝に落とせば気が済むのか。私が女を押し殺すあまりに脳内一人上手になっていくというのに。これ以上加熱してしまつたら思い余つて逆レイプするぞこの野郎！

「そんなに言うなら瀬川さん私と付き合ってくださいませ？」

ほんの一瞬の沈黙。瀬川さんは微かに眉をひそめた。いかーん！地雷踏んだか！？なにその顔、キモいってこと？！私の寿命が三分縮んだ気がする。死ぬ間にカップ麺だけは避けよう。

「俺、これでも、彼女おるし」

「知ってますよ。年下の可愛い彼女でしょ。冗談です。それに私、瀬川さんに女として見てもらわなくて結構ですって言ったじゃないですか」

言わなきゃよかつたって今朝悔やんだばかりなのに、学習しないな、私の苦し紛れ。

「え。まさか、俺セクハラ上司？」

「まあ、私が可憐な女子社員だったらギリアウトかもしれないね」「そっかーギリアウトかー。気をつけるわ。なあなあ倉橋、今から長浜でラーメン食いたくね？」

行こうぜ行こうぜと喚きだす。どうせ長浜行くならチャペココ行きたいよー！そんでラーメンより……いかん。この韻を踏んだら私セクハラオヤジ以上にゲスい。自重しろ！縦笛は昔から苦手だ

つたろう！

「瀬川さん酔ってますね。彼女部屋で一人で待ってるんじゃないんですか？」

「そんなおまえに関係なからうが。行きたくないならいい」

瀬川さんは顔を窓にそむけてふて腐れた。

「子供かつ！」

「俺だつてなあ、甘えたいときもあるつたい。はああ……。クソッ、なん言いようとかいな。すまん、今のなし。忘れろ」

「おいおいおい！！ 母性本能芽生えちゃうだろ！！ 母乳でたらどうしてくれる！！ 乳児がアル中になりそうな母乳だけだな！！」

瀬川さんはシートに深くもたれ顔を両手で覆い、再び大きな溜息をついた。疲れてるんだなあ。人間だもの。

よくよくみると、端整な横顔に疲れの影が落ちている。いつもお得意様や会社の利益、そこに付随する私たち部下のことばかり考えて、自分を顧みることはないのかもしれない。私は今までたくさん瀬川さんに仕事の悩みを聞いてもらってきたけど、この人の口から弱音を聞いたのは初めてだ。

波多なんか仕事はもちろんプライベートな悩みまで話しまくっているというのに。私になにかできることはないだろうか。仕事面でこの人のために出来ることなんて考えるのはおこがましい。

四話

今、私ができることを思案する。真夜中の運動会は無理。疲れているのに体力使わせてどうする。

ええっと、そういうエロいことじゃなくて、肩もみ？ でも、着け爪がブツ刺さりそう。えーっと、えーっと……そうだ。これなら「私のでよかったら……膝、貸しましょうか？ わざわざ迎えに来てくれたお礼です。お疲れなら横になっけていいですよ。瀬川さん頑張りすぎです」

なーんてな！！ おいおい、いい部下すぎちゃってマイツチング！ ……と、ダメ元で言ってみた提案を誤魔化そうとした瞬間。

ずん、と太腿に重みがかかった。

おおおおおおおおい！！！ 嘘、だろ……？ 心臓が口から出る……！！

ちらりと下に視線を落とすと、紛れもなく瀬川さんが私の太腿に突っ伏していた。なんだこの酔いどれ天使！！ アルコールラック！ 熱い吐息がパンツ越しに皮膚にかかる。ちょ、この感触おねしよ！！ っていうか、そこで息を吸い込むな！！

「……なんコレ、マジ癒される……。ドンキで膝枕買ってしまいそうや」

「今回だけですよ？！ タクシー降りたらなかったことにしてくださいね！」

じゃないと、変な幻想を拭えなくなる。脳内は自由だけれど、これ以上肌で知ってしまったらヤバイ。

「運転手さん、桜坂から坂上らんで六本松回って笹丘から小笹行って」

私の気も知らないで、瀬川さんは寝返りを打つと、悪あがきのよくな遠回りコースをリクエストした。

はいよ。素っ気ない返事をした運ちゃんルームミラー越しに目

が合う。バーカ！ エロいことしてねえよ！

「割増料金ですけど、いいんですか、瀬川さん」

下から見られると鼻の穴が気になるので、瞼の上に手を置いた。

「コレで千円くらい割増になるのが安いもんやろ」

「まあ、彼女にしてもらえばタダですけどね。してくれないんですか？」

「俺が甘えるわけにはいかんやろ」

「彼女が年下だから、ですか？ 一応私も年下なんですけど」

「おまえは俺に甘えて来んやんか」

許されるならば今すぐにも甘えに行きたいんですけど。あなたと合体ニヤンニヤンしたい。つてな！！

「だって、上司と部下ですよ。プライベートと同じように接するのはおかしいでしょう」

暴走しまくる思考回路は別として、私は自ら線を引く。一人の男性として見ているけれど、それ以上に上司として尊敬しているからだ。

「ごもつとも。情けないとこ見せたな。悪い」

起き上がろうとする額を押し返す。こんな好機二度とない。私だつてこのあまやかなひと時をもう少し堪能したい。瀬川さんは苦笑して抵抗をあきらめた。

「まあ、いいじゃないですか。瀬川さん。リラクゼーションのお店
の類と思って膝枕されてください」

我ながら支離滅裂。矛盾しまくっているのはわかっている。

「……倉橋」

「はい。なんでしょう」

「……いや。おまえの手、熱いな。眠たいやろくにすまんね」

くすぐったそうに笑い、目隠しをする私の手を軽く持ち上げ、身体を起こした。

「こんなことしたら、いかんよな」

言い聞かせるように呟くと、ばつが悪そうに笑った。

「……ですよね。私こそ軽率でした。すみません」

瀬川さんは顔をそらして窓際にもたれかかる。子供一人分ほどの空白ができ、さっきまで温かった太腿が寒々しい。

「なんか、すまんね。妙なことして」

沈黙に耐え兼ねたのか瀬川さんが先に口を開いた。

「いえ、別に。膝貸すくらい私個人としてはなんとも思っていないんですけど」

出たー！　口先三寸嘘八百。ほんとは脳みそ沸騰しまくってたのに、二重人格？　情緒不安定？　誤魔化しすぎてこれはもうある意味人格障害かもしれない。だって、この微妙な空気が嫌なんだもん。やらなきゃよかった、やってよかった膝枕。

「んー、ならさ。これからは言い値払うけん、そんなときは膝貸してくれん？」

「はい？」

何を言い出すかと思えば、膝枕で商売しろと？　瀬川さんになら無料で貸し出しするというのに！

彼のほうを見ると、窓に頬杖をついて、恥ずかしいのか後悔しているのか複雑な表情で私の返事を待っている。

「えー……じゃあ、一回三百円くらい」

「三百円じゃ煙草も買えんやろ。じゃあ、一回千円出す」

「それは気が引けるので五百円」

「足マッサージでも十分で千円ぜ？」

「マッサージするわけじゃないんで五百円でいいです」

「マジでか？」

「そう長々してる時間もないでしょうし、それでいいんじゃないですか」

「じゃ、商談成立？」

瀬川さんは最終確認に首を傾げてみせる。可愛い。けど、心中複雑だよ。

「売った！」

「買った！」

商談成立の握手を交わす。彼女なら、無料^{タダ}。でも、彼女じゃないから有料。

うまくシステムを作り上げて全国チェーン展開してプロジェクトXが情熱大陸出てやるうかしら。『究極の癒しを目指せ！！ 疲れた現代社会を救う女性力』ってか？！

いや、なんか風俗一步手前やし、プロジェクトXはもうやっとな。出られん！ 耳かき店事件も記憶に新しい昨今、迂闊な商売はやれない。それに、瀬川さんはただいま絶賛酔いどれ中だろうから、明日になったら忘れているかもしれない。契約書もない口約束なんてどうにでも流される。

ようやくタクシーが私の住むアパートの前に到着した。

「じゃあ、ありがとうございました」

財布を開こうとするとやはり止められた。大体ここで割り勘争奪戦が始まるのだが、今夜は瀬川さんに軍配が上がった。

「今日の膝枕代。いいけん早く降りろ」

「わかりました。毎度あり」

「おう、おつかれさん」

私は営業で鍛えた笑顔を浮かべ、車を降りた。

帰ったら極上の抱き枕があるくせに。去っていくテールランプをひと睨みして、私はエントランスにかけ込んだ。

鉄筋コンクリートの一人暮らし用アパート。隣どころか近所づきあいは皆無。時々右隣の住人が恋人を連れ込んでいるのが聞える。仕事でくたくたになって身体を横たえても痴話喧嘩が聞えてやむなくシャワーを浴びて、コップを壁に当ててしまい、次の日変な格好で寝ていて全身きつい上に寝不足だという事態が過去五回。何度か玄関先で遭遇したことがあるが、学生とも社会人ともいえない、なんだかパツとしない男だった。

玄関の照明をつけると、さっきまでの出来事が幻のように思えた。

短い廊下の左手にはキッチンと一人用の冷蔵庫。右はユニットバス。八畳のフローリングには、テレビ兼仕事兼インターネットサーフィンを（つまりは娯楽）用のラップトップパソコンが乗ったローテーブルとベッド。ベッドの足元側に収納がある。

一人分の食器やシングルベッド。来客用の食器は流しの下に仕舞われている。一応来客用の布団一式もあるにせよ、どちらも母親が高校時代の友人が泊まりに来るとき以外に使われたことがない。

犬でも飼ってしまおうかと度々思うが、ほとんど寝に帰ってきているような部屋にあんないたいけなものは置けない。動物虐待だ。

どこまでいっても一人だなあ。そう思うと途端に足から力が抜けてきた。

会社に行けば、頼りになる上司がいて馬鹿なことを言い合える同僚がいる。一介の営業に過ぎない小娘を可愛がり、人生勉強をさせてくれるお客様もいるのに。

もしここに「ドーン！」っていう黒服のセールスマンが現れたら前ノリで頼ってしまいそうだ。

が、あのまんまのビジュアルで来られたら奈落の前に恐怖のどん底に突き落とされる。あいつ、顔からして怖い。

このまま寝てしまおうか迷ったが、シャワーを浴びて、噂の曲がり角に差し掛かった肌に栄養美容液をたっぷりしみこませ、足の裏にハーブ系の香りがする冷却シートを貼ってベッドに入った。

深夜二時を過ぎれば、住宅街でもあるこの辺はさすがに静かだ。

車の行き交う音はしてもそんなに気にならない。むしろ太腿の余韻のせいで寝つきが悪い。

だいたいどーいうこと？　なんで思いついた？　膝枕好きか！　彼女にしてもらえばいいやんか！　甘えられないって、なんで？　普段どういうお付き合いしてるんだ？　ああ、待て。それは想像したくない。でも、年の行事にプレゼント交換とかしてるみたいだし、誕生日には指輪が欲しいってねだられてた。確かティファニーのリング。一緒に三越で買ったって聞いた。ペアにするしないで

口論になったとか。生活の九割が仕事で消費される彼にとって、結婚指輪でもないペアリングなんてチャライものは仕事の障害にしかならないとのこと。

お返しの彼女が独断で選んだグッチのネクタイを出勤時には絞めていたが、ブランドロゴの入ったものはお客さんの印象を悪くするという理由で、結局一見地味ないつものネクタイに付け替えている。まあ、それ以上に似合ってたけれどな！

瀬川さんは普段は仕事ばかりであり構ってあげられないことを悩んでいるようで、飲みに行くと、たまにその話題が出る。波多は「別にしゃーないやないですか」と飄々というが、腑に落ちていない様子で頭を抱える。私はなにも答えられず、黙って話を聞くだけだ。

お金を貰って体の一部を提供するのって、なんか、いかがわしい事のように思える。私の場合、心を伴っているから性質が悪い。もし、瀬川さんに望まれたら、喜んで都合のいい女になってしまいうだろう自分が怖い。

「おやすみなさい！！」

ぐだぐだ続いていきそうな思考を断ち切るために、一人きりのクセに大声を出す。

おやすみとあの人に返事してもらえる彼女が心底羨ましい。つんと痛む鼻の奥。鼻炎だ鼻炎。涙なんか出てこない。花粉症にもなったことない、風邪もここ数年引いてない。丈夫なのが私のとりえ。

五話

翌朝。 。 ともでもないエロい夢を見て、飛び起きた。

私が男だったら夢精確定だ！やべえ、マジやべえ。昨夜は下着のシート装着忘れてた。一枚二千円のショーツが！ 夢の余韻で身体の芯がねっとり疼いている。昨夜の私傷心ロンリーウーマンだったじゃないか。なのに夢でもし遭えたらなんてどころじゃなかったぞー！ 携帯電話の時計を見ると、五時四十五分。夜更かししたのに余裕の起床時間。薄いタオルケットをかぶりなおし、迷った末に、疼いている場所に指を這わせる。

うつ……。 瀬川さん、ごめんなさい。

ビックリする位あっという間に達してしまった。

新しい朝が来た、絶望の朝だ。気分爽快というには後ろめたい。しかし、朝の準備をすべて済ませる頃には、朝一の凶行も昨夜の至福も実感として薄れていた。エロい夢も膝枕も同じだったのかもしれない。

大丈夫。 瀬川さんの顔を見てもいつもどおり頭の中で留めておける。

アパートのほぼ前にあるバス亭から59番のバスに乗り込む。動物園を過ぎる頃には鮎詰め状態。バスの中では女子高生が化粧をしながら恋バナで盛り上がっていた。先輩、バイクの免許とったらしいから、今度一緒にマリノア行くっちゃん。ええーバリうらやましいー！ うちの彼氏とかさー……。 彼氏がおるだけまだマシじやー！ 博多駅で降りて会社まで歩いて五分。オフィス街の一角にある五階建てのビルに入る。エントランスにはちよっとケバいがキレイな受付嬢。朝の挨拶を交わし、エレベーターに向う。時計を見

ると七時半。出勤時間は九時だが、毎日八時には到着している。

「おはようございまーす」

靴を履き替えるために更衣室に入る。総務課のお局様と新人社員が着替えていた。鮎川ちゃんはまだ出勤していないようだった。しんと静まり返った更衣室の中で靴を履き替え、髪を一つに束ねる。

「お先に失礼します」

部屋を出ると、ドア越しに声が聞こえてきた。営業課の人は違うわねえ、靴だけのためにロッカーが割り当てられるんだもの。私たちなんて会社の制服よ。スカートって足が冷えるのよねえ。スカートでうちの営業が勤まるか！ 心の中でババアに鉄槌を食らわせながら、営業課に向う。

「おはようございまーす！」

「おはよーさん」

ドアを開けると、まだ誰もいない部屋で、すでに瀬川さんがパソコンに向っていた。ちよ、いきなり二人きりですか？！

「は、早いですね。ちゃんと寝てます？」

「昨日いきなり飲みに誘われたけん、ちよっと仕事残ったつちやんね。まあ二時間寝た」

極上の抱き枕とね。あらぬ夢で見た瀬川さんの幻想はもうあまり思い出せない。

「えー、大丈夫ですか。無理しないで下さいよ。今日も暑いらしいんで、ぶっ倒れないで下さいね。あ、コーヒーいれましょうか」

「熱いやつ頼む。ちかつぱ苦くして」

「胃悪くしますよ」

「はは！ 俺がそんなヤワな奴と思いよーとか」

「まあ、若干」

不意に口をついた言葉。昨夜の膝枕が脳裏に過ぎる。

瀬川さんも同じなのか、一瞬言葉に詰まった。

「倉橋には敵わんね」

「いやいや、瀬川さんには及びません。じゃ、コーヒー煎れてきま

「す」

早足で給湯室に向かうと、換気扇の下で波多と女子社員が煙草を吸いながら雑談していた。

瀬川さんはキリつとした男前だが、波多はよく見りや線の細い優男。ノリが軽くて女子社員にも人気がある。私のタイプではないが、顔がいいことは認めてやんよ！ 私何様！

「オハヨーっす！」

「おいっす！ なんアンタ、もう来^きとつたん。コーヒーいれるけど飲む？」

コーヒーメーカーのフィルターにコーヒーの粉を三杯入れながら、波多に尋ねる。女子社員は波多に挨拶をして給湯室をでていった。

「俺、缶コーヒー買ってきとっけん、いらん。瀬川さんと朝の一杯楽しめばいいやん。お気遣いなく！」

「なんやそら！ 変な気回すなつて、え？ あんた瀬川さん来とるのしつとると？」

「俺が知らんわけないやろ」

波多に腕をグツと引き寄せられ耳打ちされる。

「んで？ 昨夜はなんかあった？」

ミントと微かなCKのエタニティMENが香る胸元を軽く突き飛ばす。

「あるわけなかるーが。なん言いようと？」

「ようやく倉はっさんが鳶に盗られた油揚げ奪還に動き出したかと思つとつたとつまらんねー」

「……は？」

「倉はっさん、俺が気づかんとでも思いよーと？ あんたは瀬川さんの部下歴長いつて言いよつたけど、俺と倉はっさんの同僚歴も二年以上ぜ。恋人も作らんで女捨てて仕事に没頭しとるんやなくて、仕事と上司に恋しとつちやる？」

周り（もとい私）を気遣つてか、波多は至近距離で小声で言った。「嘘、何で？ 色にいでにけり？ これバレバレなん？ 周知の沙

汰？　っていうか、本人にも？！」

私は取り乱し、波多の襟元を両手で掴んでがっくがっくんに揺らした。

「いや、ちよ、倉、倉はっさん、落ち着けて」

「落ち着けるわけなかるー！？　嘘やるー！？」

顔が熱い。化粧が剥げる。恥ずかしくて死にたい！！

波多は私の手をはぎ取り、乱れた襟元を直して咳払いをした。

「ぶっちやけ瀬川さんは気づいとらん」

「なあんでアಂತアが解ると？　読心術使いかつつうの！」

「んでもって気づいとるの俺だけやろうね。普段の倉はっさん女捨て過ぎやけん」

「捨てとらん！」

思わず太い声が出てしまった。……咳払い。

「……もともとちよっぴりガサツなトコあるけどー、実は中身は結構女らしいんだ・ゾ！」

コン、と波多の胸元にかわゆく拳をぶつけたほぼ同時に、ガスッと容赦ないチョップが脳天に落とされた。

「きさんこの！！　なんばしよつとか！！」

「そう、それ。それじゃないともう倉はっさんの意味ないもんね。

あービックリした。鳥肌で死ぬかと思うた」

「誰がナチユラルボンキラーや！！！」

「言ってないけんね」

「ですよね」

「まあ、そんなことより。コーヒー出来とるけどいいと？　瀬川さん待っとならないん？」

「そつや！波多坊のやらしい読心術に惑わされとる場合やない！」

波多に背を向け、食器棚から瀬川さんと自分のマイカップを出してコーヒーを注ぐ。

「えらい言われようやな。まあ、俺はあんたの味方やけん、頑張り」

「えー、いいよ。別に。振られるのもやけど、それ以上に今の職場

の雰囲気壊しとつないもん。あんただって仕事楽しいやろ？」

「まーそらそうばってん」

「やるー？ もしかしたらこの際愚痴るけん、飲み付き合ってよ」

「じゃあないな、任せとけ」

波多は腕を組んで壁に寄りかかり道を開けてくれた。

「今日も一日頑張ろーや」

「倉はっさんも」

「おうよ」

互いに笑いあう。なんか、二十歳過ぎの青春って感じ。恋人いないけど、同僚に恵まれているだけマシじゃないか。一人で悶々としているより、人に話せるのって気が楽になる。今度の給料日あいつに奢ってやってもいい。そのかわり、居酒屋やけどな！

私が部署に戻ると、瀬川さんは机に突っ伏して寝息を立てていた。

「瀬川さん」

コーヒーをデスクの邪魔にならないところに置いて控えめに声をかけた。

「んー……。倉橋……？」

「コーヒーできました。おまちどうさんです」

一瞬寝ぼけた顔で目をこすると、ハツとしたように身体を起こした。

「今何時や?!」

「七時五十分です」

「ああ、そうか。あー……びっくりした。寝ぼけてここが何処かわからんかった」

「大丈夫ですか」

「当たり前やろ」

瀬川さんはカップに口をつける。私もデスクについてパソコンを立ち上げた。

一瞬だけ寝顔見れた。早起きは三文の得って、本当。昔の人はやっぱり賢い。今日も一日。明日も一日。寝顔だけで一週間、頑張

れそつな気さえしてきた。単細胞に生まれてよかった。父ちゃん母ちゃんありがとう！

六話

瀬川さんと波多は相変わらず奔走しているようだが、本日の私は経費の計上や提出する書類を作成する為に部署に留まった。お客さんの呼び出しもなく日和ってしまいそうだ。

その証拠に今年出来た後輩の小林由香ちゃん(22)と人事部から異動してきた今泉恭子さん(35)と世間話なんぞに花を咲かせている。

「うちの特攻隊長も相変わらずやねえ」

恭子さんはウエーブがかかった豊かな黒髪を一つに束ね直し、タイトなパンツスーツからでもわかる肉感的な身体をよじらせるようにして足を組んだ。

「瀬川さんですか？」

肩までの明るめの茶色いゆる巻き髪がゆれるたび甘い香りが立ち昇る。同じく鼻にかかったような甘い声がただけで、私が男なら胸が高鳴る。いや、今でも充分きゅんきゅんしてる。ああ。いい匂い。

改めて思うが、うちの部署の女性社員は華がある。

……あれ？ なにこれ。私があてはまるところはどこ？ 私がここに採用された理由って雑草のようなバイタリティと肉食系酒飲みってとこだけ？

私が由香ちゃんの傍でくんくん鼻を鳴らしていると、恭子さんに膝をぶたれた。すんまっせん。

「こないだも社長と喧嘩しよったってよ。実質うちの会社のトップは会長派の専務やし、会長も現役営業マンみたいなもんやけど、常務と経理部の部長が社長派やん。瀬川くんは会長のお気に入りやけん、だいぶ目の仇にされるとよ。ねえ。倉ちゃん」

「ああ。そうみたいですね」

「あんだ、そんな他人事みたいな！ 瀬川くん鹿児島支店に移動さ

せられるかもしれんとに暢気やねえ!」

「……え?」

「瀬川は優秀やけん鹿児島支部ば盛り上げてもらおうか、みたいなことを金澤部長が言いよつたもん」

金澤部長は人事部の部長だ。そんな話聞いとらん。寝耳に水つたあこの事ですよ!

「こつちには波多くんと倉ちゃんつつう有力な社員がおるやろ?

やけん瀬川くんは鹿児島支店の営業課長になつてもらうかって案が出るとよ」

「係長から課長ですか。でも、別にうちの課長でもよくないですか?」

由香ちゃんが声を潜めて、デスクで携帯を弄りながらニヤニヤしている松本課長を横目で見た。

「あいつ、常務の甥っ子やん。こないだ三千万の新築とつてきたけど、あれ常務の知り合いらしいよ」

と恭子さん。

「縁故、全然駄目じゃないですか……」

由香ちゃんが溜息をこぼす。

「倉ちゃんは瀬川くんから何も聞いとらんと?」

「はい。何も」

もし、そんな話が浮上したら、すぐに波多か私の耳にも入る。お客様の引継ぎがあるから会長をはじめとする上層部が忙しくなるはずだ。

「ああ、じゃあまだ確定やないんやね。来年度までには立ち消えになつとるかも知れんね。瀬川くんは会長の秘蔵っ子やし」

「……なら、尚更移動になる確率が高いですね。社長派の人達は左遷のつもりでしょうけど、会長は違つと思えます。瀬川さんの経験の為に、有り得ない話ではなさそうですね」

私がそう言うと恭子さんは、なるほどねえ、と頷いた。

「さすが倉ちゃん。瀬川くんの一歩弟子」

師弟つつよりもう主従だよ。むしろご主人様と犬でも構いません。いかん！ 想像だけでDMが開花する！ いや、むしろあれは虐めたい！ ヤバい、涎が上から下から

……もしも、私がサ ラレだったなら、瀬川さんにドン引きされて嫌われる。そしてきつと精神異常者として公安からマークされる。友達も出来ない。社会的地位はおろか、人権を尊厳を保護する団体からもはじかれる。

やばい！！ 女子とかスイーツとか以前に！！ ああもう脳みその自由って限らない上に責任ないから素晴らしい！！ 理性に感謝！！ 本能のままに生きてたら、半年前に犯してたよ！！

「倉ちゃん、大丈夫？ やっぱり、師匠いなくなるとか聞いたらシヨックだよ。ほんと、二人を見てたら男女の違いなんて見た目ぐらいだもんね。色気とか全くないし」

はじめは慰めにかかっていた恭子さんの口調にだんだん吹きだし笑いが混じってくる。

ネット掲示板で記すなら。

「倉ちゃん、大丈夫？ やっぱり、師匠いなくなるとか聞いたらシヨックだよ。ほんと二人を見てたら男女の違い（笑）なんて見た目ぐらいだもんねww色気とか（笑）全くないしwwww」

「ただだけw打つんだよってくらい。恭子さんはもう「ブツ」とか言って口元を押さえて顔をそらす始末だ。」

「恭子さん、ウケすぎやないですか……」

「だって、絵に描いたようなスポ根なんやもん。倉ちゃん黙ってれば美人なタイプなのに」

「……なん、だ、と……？ 波多あああああ！！ 聞いたか今の！！ つつうか、聞け！！」

「やー、でも、瀬川さんつてば実はそれが狙いだつたんじゃないんですか？」

由香ちゃんが、私の気になり始めた二の腕をちょんちょん突く。

「倉橋先輩のこと構いたくって仕方なかったとかー！ 先輩が従順

だからつい度が過ぎちゃったみたいなのー」

きゃあーっと両手で口元を押さえる。

えっ、ちょ、それ私もやっていい？ やっていい？ きゃあーってヤツ！ タイミング逃したからもうやれないけど！

「まっさかあー」

嬉し恥ずかし苦笑い。爆発しそうな下心が口元を引き攣らせる。

それならそうと最初から手取り足取りベッドでさあ！ 鼻血がでそうなのに最強の鼻の粘膜が許さない。体育の時にバレー部のアタックを顔面で受けても出なかったもんね。どうなってんの、私の粘膜。一人で首を傾げていると、ドアが勢いよく開いた。

「お疲れ！ 倉橋、ちよっと会議室来い！ すぐ！」

「は、はい！」

私は反射的に椅子から飛び上がる。

「出た鬼軍曹」

恭子さんの小声。

「背え高いから余計恐いですよね」

由香ちゃんは肩を竦めて頭を低くした。

「いつてきます」

私は二人に片手を上げて、瀬川さんの後を追った。

大股で歩く瀬川さんのすぐ後ろを小走りですいていく。新人の頃を思い出してつい口元が緩んだ。

でも、今はそうもしてられない。

「なんですか？ 藤田さんから何か連絡でも？」

会議室のドアノブに手をかけた瀬川さんが、読めない表情でじつとこちらを見た。

「いいけん入れ」

「はい」

「おまえ煙草持って来とう？」

「ポケットにいれたままでした」

「よし、じゃあそっこの端っこのソファ座れ」

「は、はい。失礼します」

内心ヒヤヒヤしながら私はグレイの安っぽいソファに腰掛けた。

瀬川さんの手によりドアの表は使用中に切り替えられ、鍵が掛かった。

「もつと端っこ」

瀬川さんは顎を軽く振って促す。

「すみません」

いいながらお尻で移動すると、瀬川さんは上着を脱ぎ、ネクタイを外してカラーシャツのボタンを三つほど外した。なにしてんのかよくわからないが、心臓は胸をブチ破って行きそうなくらい早鐘を打っている。

「三十分頼むわ」

と私の手を取って五百円硬貨を三枚置いた。

「は、い？」

どさつと太腿に昨夜の感触。

「眠気がやばいんよ。書類なら後で手伝うけん、頼む」

瀬川さんの熱い掌がきゅっと私の膝を掴んだ。わかる、わかるよ。

眠いのは！ お手々熱いからね！

はわわわわわわ！！ 心の準備会場はどこ？！ 事件が会議室で起こってますけど！！

「ああ……マジ気持ちいい……」

それ、ベッドで言ってる。私の中で。いや、これはさすがにリアルすぎてやばい。

「せ、せせ瀬川、さんっ」

声の上擦ってしまう。

「んー……なんでもする。酒ならいくらでも奢るけん、頼む」

「もおおおお」

「牛」

牛ちゃっわ！ こっちの気も知らないで瀬川さんは目を瞑ったまま頬をすり寄せる。

「三十分経ったら起こして」

そう呟くとあつという間に寢息を立て始めた。こつなつたら、髪の毛とか顔とか触りまくってやる！ チツスするかもよチツス！！眠れる獅子、いや、眠れる王子様が目覚めてしまつと可哀想だからしないけど！！ ああもつ、定年まで頑張るよ！ 馬鹿！！

七話

ちょっと瀬川さん、いいですか。

私、三十分も身動き取れなくて坐骨神経痛とかになりそうなんですけど、それよりですね。もっと、悪いことにですね、内腿のあたりですよ、あなた様の涎がうつすら染みてるんです。普通だったらキモいんですよね。でもですよ。この私がそんなふうに感じるわけなくてですね、むしろ、なんか、こう、ほら、ムラムラしてるんですよ。あなた様はちっちゃく軒かいてるぐらいの爆睡っぷりなのに！

生理近いからね。そう。そういうことにしていいですか。

ああもう、キツスキツス！ アメリカのハードロックバンドじゃないよ！ 今一番やりたいことですよ。瀬川さん、そんなに無防備でいいんですか！？

もう、やっちゃおうと腹をくくった。顔を近づけ、唇を重ねる。

「ん……」

瀬川さんが小さく呻いて、うつすら目を開けた。

「倉橋……？」

「私、ひざまくらより瀬川さんの抱き枕希望ですけど」

「え？」

瀬川さんが豆鉄砲を食らったかのように固まった。

「……瀬川さん、こういうの、やっぱ、駄目ですよ。瀬川さんはそんな気なくても、もし誰かに見られたら、どう思われるか、わかるでしょう？ それに、私、瀬川さんが好きなんです」

「倉橋……」

低い声で、真剣な目で、真っ直ぐ見つめてくる。

「俺も、お前のこと好いとるんぞ。わからんかったんか？」

「で、でも、彼女が……」

「あいつより、お前のことが好きなんよ。俺、やっと気づいた」

「瀬川さん……」
ゆつくりと瀬川さんが近づいてくる。私は目を閉じて受け入れ態勢をとった。

「倉橋……!」

ドンツと鼓膜に低い声。ぱっと目が開いた。え? どこどこ?!
情熱キツスはどこに?!

「やべえ、四十分も寝てしもうた!」

「え……?」

瀬川さんは私に背を向け、上着を羽織ってネクタイを締めている。
え? なに? 事後? いや。

くるりと瀬川さんはこちらを向き、ブツと吹きだした。

「倉橋、よだれでとるぞ」

ふと口元を拭くと涎のあと。

「えええええ!? まさか、私も寝てたんですか?!」

「そうたい。目え覚めたらお前も寝とるもん。顔が間近でマジびびった」

「私、もしかして瀬川さんの顔に涎たらしめてたりしてないですか?」

「しとらん。しとらんけど」

含める言い方をして、胸元をさした。

ん? と自分の胸元を見ると、シャツが一部色濃くなっていた。

「おまえ意外と胸でかいんやね。いやはや、ゴチ!」

「ゴチってなんですか! セクハラ! それセクハラですけどー
!」

私は思わず両手を胸の前で交差する。

「ああ、そうやな。すまんすまん。だってちよつと俺の顔に乗つとつたっちゃもん」

何てことないように瀬川さんは笑い飛ばした。だってじゃねえよ。
可愛いな、馬鹿。

「ご要望あらば挟んでもいいですけど！ なんなら質量、その手で計ります？ いやいや、神の悪戯って怖いね！

「あー、でもスツキリした。おまえも疲れとったんやね」

「瀬川さんほどじゃないですけどね」

「なん、怒つとーとや」

「ご都合主義な夢オチをやっちゃった自分に腹が立ってるんですよ！ とは言えない。

昨夜の夢が男性向け十八禁なら今の夢なんて少女漫画。くっそ！ 単細胞な夢見てんじゃねえよ私！ ゆうべの気合い見せんか！！ ああ、いずれにせよ欲求不満だ。

「呼び出しなくてよかったな」

携帯をチエックしながら私の隣に腰を下ろす。

「そうですね。あー……ヤバい。戻らなきゃいけないのに……メイク崩れてません？」

つい、横を向くと瀬川さんと至近距離になっていた。

「いや、大丈夫」

ちらつと覗き込み、ブイツと顔を逸らした。

「じゃあ、俺先に戻るわ。割増分は後で払う」

あれ……？

瀬川さんはいつも通り大股で会議室を出ていった。

顔が熱くて、鼓動が激しくなる。

一瞬だったから見間違いかもしれないけど。

いや、でも、なんか、瀬川さんの唇の端に、パールのラメがついていた……ような……？

見間違い？ 嘘！？ え、でも、まさか……。がつくんがつくん夢心地の舟漕いでるときにぶつかっちゃったとか！？ くっそー！ 無意識の所業とかもつたいなさすぎ！ 感触とかまったく残ってないけど、寝ぼけてる？

ヤバい。こうしちゃいられない。早く戻らなきゃ。昼食後の睡魔は最強だから真偽のほどは、わからんわからん。うっかりしていると

ピシャッと四時をお知らせされちゃうよ！

部署に戻ると由香ちゃんがおらず、パソコンと向き合っていた恭子さんが振り向いた。

「なに？ どうしたの？ 久しぶりにどやされたん？」

「え？ あ、いや」

「目が腫れとるけん、泣かされたのかと」

「あはは。大丈夫です」

むしろ夢心地でしたけど。恭子さんは豊満な胸に私を抱き寄せ、よしよしと頭を撫でてくれる。

「あの鬼のしごきに着いていける女子は倉ちゃんだけよ。あなたのおかげでうちら楽させてもらいよるけんねえ」

うつつと芝居がかった声を洩らす。ああ、おっばいおっばい。お腹いっぱいを略しても、おっばい。

「恭子さん、揉んでもよかですか」

「あんたねえ。それで癒されるなら、よかよ」

私は遠慮なく顔を埋め両脇から手で押さえ込む。亀仙人のアレだ。

「ぬうつつ。超癒される超癒さるうつつ」

「黙ってれば、いい線行くのに……」

恭子姐さんの薔薇の溜息は私をきゅんきゅんさせるだけ。

「元気ですうつつ」

私と恭子さんを見ていた部長がおれも混ぜてと言ったが無視だ。

「おまえなんしようとか。ハッスルタイムか」

「女同士っていいっすね。俺もハッスルしたいっすわー」

いつの間にか戻ってきていた瀬川さんと波多がドアの前で呆れている。

「瀬川くんがスパルタやけん、アタシが癒してあげよると」

「俺も癒してくださいよ」

「波多くんは男やけん、もっと頑張らんと」

「えー。男やけんとかーそれってー男女差別じゃないんですかー」
「せからしい。男は男。女は女。区別やるももん」

恭子さんはピシヤリと言いつ切り、私をギュッと抱き寄せた。

「じゃあ俺も。瀬川さん！」

「いって!!」

ガツと波多が瀬川さんの股間にラガーばりのタックルを決める。

「いってえ、馬鹿!! 一瞬玉がひゅってなつたやんか!!」

「ちょ、スラックス意外に薄いんすね……頬にガチ生稲荷でしたよ

……たぶん竿も……」

「俺が被害者やるーが!! なんやその顔は!!」

瀬川さんは股間を押さえて、波多は頬を押さえてガク然としてい
る。

ズルイなにそれそつちのが楽しそう!

恭子さんは指をさしながらゲラゲラ笑っている。

「いいねー、アホな若者!」

おい、波多そこかわれ!! いいなあ男同士! あんなこといい

な!! できたらいいな!! 私もしたい!!

「んで? 波多くん。瀬川くんはいかほど?」

恭子さんが舌なめずりをする。魔性や!! 魔性がある!!

「ガチで金棒レベルになるかと」

「アホか!! 人並みや!!」

どつちや! ぐつと我慢して拳を握る。

「んで? 倉はっさん、どーよ姐さんは?」

「桃源郷があるなら、ここかと」

「ガンダーラ!!」

と波多。

「ユートピア!!」

と私。互いにガツツと固い握手を交わす。

「仲いいねえ。あんだ達」

恭子姐さんに言われて、私と波多は目配せをする。

「戦友ですから」

「友と読んでね」

「付き合っちゃえば？ 二人ともチヨンガーでしょ」

恭子姐さんはニヤニヤしながら私たちを見る。

「ええええ。俺と倉はっさんがつすか？」

「ちよ、恭子さん！」

「夫婦漫才で社員旅行盛り上げてよ。ねえ面白そうじゃない？ 瀬川くん」

そこで瀬川さんに振るの？！

波多に助け舟を求めたが、ヤツは目があった一瞬だけニヤリと笑い、瀬川さんの動向を伺っている。

「はは、そりゃ若いもん同士の成り行きですけん、俺はなんとも」

瀬川さんは苦笑して肩を竦めた。

「ちなみにチヨンガーは男を指す言葉なんで、倉橋に使うと可哀相ですよ。しかもそれ、五十代の人が言ってたの聞いたことありますけど、一度きりでしたね」

「なによ、瀬川くん。アタシがババアだっていいたいワケ？」

「いやいや、今泉さんは博識やけん」

「ふーんだ」

「そんな歳変わらんでしようもん。別嬪さんが怒っても俺は喜ぶだけですよ？」

「なに言ってるのよっ」

目くじらをたてる恭子さんを宥めにかかる瀬川さん。

ふと波多が私に寄り添い、小声で言う。

「よかったな。倉はっさん」

「へ？」

なにがよと波多を見たがニヤニヤしているだけで答えない。

「倉はっさん、今夜、飲み行く？」

「えっ、今日も？」

「瀬川さん昨日駄目になったやん。誘おうや」

「なら行く」

「なん二人でコソコソ話よると？ あやしーい」

恭子さんが再び矛先をこちらに向けてきた。

「今夜飲み行きませんか？ 恭子さんと瀬川さんと俺と倉はっさんの四人で。なんなら俺、恭子さんと二人がいいんですけど」

「出た。波多の面食い。どうせ私より恭子さんの方が別嬪でポインヤからねー！」

「おまえも変わらんって」

不意打ちに思わず瀬川さんをガン見してしまった。時間が止まったのは、恭子さんも波多も同じだった。

「なんや？ 皆揃って」

「どうしたん瀬川くん。鬼の霍乱？」

「どういうことですか。俺だって部下を褒めますよ」

「でも今のつて上司っていうより、男目線やんか。やだ。倉ちゃん、モテ期よモテ期」

「えええっ」

顔が熱い！ 瀬川さんマジっすか！？ そういうことなら私喜んで女見せますよ！！

「ちよつと今泉さん勘弁してくださいよ」

「え、じゃあ、やっぱり恭子さんは俺と二人で飲みに行くしかないっすね！」

「いや、俺、どのみち今日予定あるけん」

「また仕事お？ よう接待ばっかで飽きんね」

「プライベートですから」

舞い上がったた気持ちが一気に下降する。イカロスってこんなガツカリ感かしら。

「じゃ、俺、仕事に戻りますんで」

瀬川さんは一抜けたと言わんばかりにデスクに戻った。

「アタシも週始めから飲みに行く体力ないから、金曜にでも誘って」
恭子さんもひらひらと手を振り、デスクに戻る。

「じゃあないしやあない」

波多がぼんぼん私の肩を叩く。

「じゃあもう、二人で行こうや!!」

この気持ちのまま家に一人で帰りたくない。

「おっ、倉はっさん好きやねー」

「財布エコノミーに家飲みな！」

「いいね〜」

「おまえごときに大したもんは作らんぞ」

「えっ、なんか作ってくれるん？」

「なんや文句あるとや？」

「ないない。人が作ったもん食えるとか久々やんね。じゃあ俺もつまみ作るわー。ちょっと仕事片付けてくる」

波多は嬉しそうに笑い、じゃ、後でと出ていった。

八話

「おじやましませーす」

「なんもないけど、どーぞ」

狭い玄関なので先に両手に荷物を持った波多を通してやり、私はその後が続いた。散らかさない程度に靴を脱いで、波多はずんずん奥に進んだ。

「意外に倉はっさんの部屋きれいやね」

「意外言うな」

「いや、なんか一升瓶とかそこら辺に転がっるとるんかと」

「人をアル中みたいにいうな」

流しにスーパードで買ってきた品物を置き、がさがさと音を立てながら中身を取り出す。

「ビール何本か冷凍庫入れとこうや」

「うん」

私は手渡された500mlの6缶パックをばらして四本冷凍庫に入れる。

「倉はっさん何作る？」

「オイルサーデインの和風オーブン焼きとスパイシーチキンもどき。

波多は？」

「いいねー。おれはゴーヤと豚肉の味噌炒め」

「んじゃ、味噌と酒出しとくね。砂糖と塩はガス台んとこあるけん。

鷹の爪は？」

「使う。ごま油、もここにあるね」

冷蔵庫から味噌と酒と鷹の爪を、オイルサーデインとんにくと鶏もも肉を袋から出し、流しの下からまな板と包丁を出した。

「やっぱ二人並ぶと台所狭いな」

「もしかして、今まで並んだことないと？」

波多は哀れむようにいい、バツと口元を覆った。

「うっさいなー。別にいいやんか。先に私の下ごしらえからしていい?」

「ああ、うん。じゃあもうビールあける?」

「あけちゃう?」

「喉渴いたけん飲もう飲もう」

「いえーいとお互い言いながら、波多はさつき入れたばかりのビールを取り出し新たに二本補充した。

プルタブを引き、缶のまま乾杯して一気にのどに流し込む。

「つかー！ー！ お疲れ波多！ お疲れ自分！」

「ぶるあああつ！ お疲れ！ うめえ！」

「とりあえず向こうでテレビでも見よっていいよ」

「おう。じゃあ、そうするわ」

私はビールを置いて、オイルサーディンにとりかかる。

ニンニクを二欠片薄切りにして中の油を少し捨てて入れ、昆布茶を適当に小さじ二杯と醤油をたらし、軽く菜ばしで混ぜる。あとはそのままオーブンで焼いて、最後に鰹節をのせれば完成。

次は鶏肉を軽く洗い、キッチンペーパーで水気を取り、一口大に切ったらビニール袋に入れて、ガラムマサラとフェヌグリークシード、ターメリック、コリアンダーといったスパイスを適当に振り入れ、塩も入れる。後はぐっちゃぐっちゃ揉みまくってしばし放置！

「よーし、後は焼くだけ。波多、チェンジ！」

「もつ下ごしらえ終了?」

「おうよ」

波多は上着を脱いで腕まくりをする。

「倉はっさん苦いの大丈夫? 甘辛味噌でもイける?」

「私に嫌いな食べ物なんてないわ！」

「たくましいわー。さすが倉はっさん、フェミニストいらす」

「せからしい！」

「でもさ、そんな倉はっさんでも瀬川さんの事になるとグダグダやもんね」

「差し込んでくるねー、サクツと」

波多はゴーヤを気持ち厚めに切る。

「豆板醤とかある？」

「ちよこつとなら残ってるかも。オイスターソースは？」

「あつたらいいね」

私はビール片手に冷蔵庫から小瓶を取り、波多に渡した。

波多は塩揉みしたゴーヤを洗い、深皿に味噌と豆板醤とオイスターソース、砂糖を加えて掻き混ぜた。ニンニクを細かく刻んでフライパンに入れたゴマ油に投入し、弱火にかける。

私はもう一枚フライパンを出して隣で加熱する。油が温まってからさきほどスパイスに浸した鶏肉を入れ、蓋をした。

電子レンジのオーブンで焼いたオイルサーディンも出来上がったので花かつおを乗つけて醤油を垂らす。

「このオイルサーディン美味しいね！ おれも今度作る」

「やるー？ イケるやる、簡単やしオススメよ」

台所に立ったままそれをつまみながらビールを飲んだ。

ほどなくして出来上がった互いの料理を皿に盛り、テーブルに移動した。

「やっぱ味噌炒めって美味しいよね」

「いや、このスパイシーチキンも美味しいね。タンドリーチキンっつ

うの？ アレっばい」

「こついうのってやっぱビール合うよね。てか味噌炒めって白飯欲しくなる」

「あー、わかるわー」

テレビはBGM替わりでまったく内容ははいつてこない。

しばらく顧客のあるある話して盛り上がっていたが、いつの間にか瀬川さんの話に戻っていた。

「それにしてもやっぱ瀬川さんって無意識に人誑すよね」

波多の言葉に私はつい苦笑する。

「営業は天職だって言ってたもんね」

「やたらタイピング善いしね。あん人駄目ばい。一步間違えたら女の敵になるタイプぜ。自覚ないから余計質悪い」

「波多だつて女の子に人気やんか」

「おれは意識的にそうもって行くようにしとるもん。女の子に限らず、営業だつて努力しよるとよ」

「そうなん？ あんたつて何でもそつなく出来るヤツと思ひよつた。瀬川さんだつて身を粉にして働きよるやん」

「まあ、おれも瀬川さんも元がいいけんね」

得意げにニヤつく顔面に作りたてのふるふき大根とかつけてやりた。

「あつそう！ そういや波多は彼女作らんと？ モテるのに」

「特定はおらんつてだけ。いずれ地主さんとこの娘紹介してもらつつもりやし」

「うわ、怖っ！ 最悪やん」

「最近ちよいちよい見合いますめられるんよ。倉はっさんはない？ 藤田さん辺りが持つてきそつなもん」

「ないよ。夫人が多分私が瀬川さん好きなの感づいとるっぽいし」

波多は後ろに片手をつき、ベッドにもたれて、解せないという表情でビールに口をつけた。

「結局倉はっさんはいつ頃から瀬川さんのこと意識し始めたん」

「えー、もうほとんど初期からやないかな。普通にかっこいいし、仕事熱心やし、うちらのこと親身になつてくれるし」

「おれ、ぶつちやけ瀬川さんも倉はっさんのこと好きやと思ひよつたんよね」

「はあ！？」

四本目のビールを嘔きそうになりながら、波多を見た。

「やけんなんで他の女と付き合いよるのか不思議でしょうがないんよ」

首を傾げながら、波多は五本目に口をつける。

「人つちやよう解らんばい」

「自分の物差しで人を計るなってよく聞くでしょ」

私が出たり顔で言う波多は、うーんと唸り、ベッドに後頭部をつける。

「瀬川さん、なんであんなと付き合いよーとやる」

「ハアアア、とわざとらしい程の溜息。」

「……あんなのって、あんな会ったことあるん？」

「あるよ。どんなにか聞きたい？」

「聞きたくない」

「あ、そう？ おれめっちゃ言いたい」

「やだ」

私は耳を塞ぐ。波多は身を乗り出して接近してきた。

「せがわさんのかのじょー」

大きな声で聞かせようとしてくるので、私は「あーーー」と言いながら耳に当てた手を小刻みに動かす。波多は私の手首を掴んで、耳から引き離すと意地の悪い笑みを浮かべた。

「観念しい」

「もう！ 嫌って言いよるやるーが！ いじめっ子！」

見たこともない彼女が私の頭の中で具現化するの嫌だ。

「瀬川さん絡みになると倉はっさん途端にか弱いのお」

手を離し、つまらなさそうにそっぽを向く。

私の妄想力をなめんなよ。吐息で内腿暖められただけで18禁ドリームみるくらいなんだからな！

黙ってビールを飲んでると、波多はテーブルに頬杖をつきながらテレビに集中し始めた。

瀬川さん、今頃は彼女と一緒になんだろうな。ついついそんなことを考え始めると、どんどん止まらなくなってきた。ビールを飲み干すと、水分過多のせいなのかトイレに行きたくなった。

「トイレいつてくる」

「うんこ？」

「違うよバーカ！」

舌を出して、立ち上がる。波多はじつと私を見て、へつと嫌味な笑いを浮かべた。

いちいちムカつく奴だと思いつつも尿意に急かされ無視した。

トイレから戻ると波多は食器を片づけていた。

「置いたままでいいのに」

「別にやることねえし、美味しいもん食わしてもらったけんこんくらいせな」

波多は手際よく食器を洗うと水切りに立てかけていく。

「今日さ、一人で居りたくなかったっちゃん。付き合ってくれてありがとーね」

私は隣で洗いあがった食器を拭いていくことにした。

「まあ、そらそうやるうね」

エタニティが強く香る。不意に視線を上げると目が合った。

「仕事のときのバイタリティの三分の一も出しゃ、俺の出る幕はないまま瀬川さんがここにおったかもしれんとな」

「そんなの、わからんやん」

「わからんけどさ」

波多は手を拭くと上着を羽織り帰り支度を始めた。

「もう帰ると？」

「朝までおれってか？ あんたどこまでぼけつとしとるん？ どうせなら半年より前に瀬川さんを家飲みに誘えばよかつたんよ」

きつい口調に胸がヒヤリとした。

「なんで惚れた男にガード固くしたん？ 自分がなんとも思ってたない男が同じようになんとも思つたらんと思ひよーと？」

「でも、波多だってなんとも思つたらんやろ？」

嫌な鼓動がせりあがり、声がうまく出せない。

「思つたらんでも、おれはセックスくらい平気のできるぜ。あんた隙だらけやもん」

波多の冷たい目に身体が強張って後退りしてしまう。

「ビビッた？」

ふっといつものからかうような目になり、頭をわしゃわしゃと撫でられた。

「まあ、そういうことちゃんと踏まえてこれからは居酒屋にしようや。おれもつつかり手出し兼ねんけん。じゃ、倉はっさん、ごちそーさん。また明日ね。おじやましましたっ」と

何事もなかったように私を通り過ぎると、さっさと出て行った。ばたん、とドアが閉まると、一気に緊張の糸が解けた。

九話

想定外の波多の脅しに戦戦恐々。

女捨ててるとかおっさんとか言いたい放題だったくせに、なのにあの変わりよう。言ってることは正しかったけど、悔しい。久しぶりに感じた身の危険に膝が笑っている。

はいはいどうせ馬鹿女ですよ！ 波多の言った事は正しい。正しいけど、素直に受け取れない。

瀬川さんが好きすぎて、失敗するのが怖かった。女らしくなんて柄じゃないし、でも、悲しいかな、私はどうしたって女。部下として傍に居れるだけでいいなんて結局は強がっているだけなんだ。

見ない振りしていた嫉妬や羨望や言いようのない怒りみたいなのが交ぜこぜになって泣けてきた。どうせ誰もいない。酔いも手伝って涙が止まらない。もういい。泣こう。

好き、好き、超好き。って戸川の純ちゃんか！ でももう私にはそれしかない。愛してるって言われなくなったら殺す気にはなれない私だったら、仕事で疲れてる瀬川さんをいっぱい甘やかすのに。お金だっぺいらない。でも、他に方法はない。受け取らなかつたら、瀬川さんにひざまくらしてあげられないから。

別にガードを固くしてるわけじゃない。

「うあああああん」

涙引いてきた。あは。超声出てる。ぎゃあぎゃあ喚きながら泣くのも面白い。

号泣も馬鹿馬鹿しくていいな。

泣いてるのが笑ってるのかわからなくなってきたので風呂にでも入ろう。マスカラが目に入って痛い。

風呂から上がると、妙にすっきりしてしまい、久々にパワーヨガのDVDなんか見ながら運動したらガッツリ眠くなった。まだ22

時。

さーて明日の冴子さんは？

『瀬川さんの膝枕？』

『ごめんな波多坊！』

『ありがとよマイフレン（ド）』の二本です、と。

「おやすみなさい！」

一瞬羊の替わりに瀬川さんでも数えようかと思ったが、興奮してきたのでやめた。眠気覚ましたよ。

『あんたどこまでぼけつとしとるん？ どうせなら半年より前に瀬川さんを家飲みに誘えばよかつたんよ』

波多の言葉を思い出す。

あれ盲点！ 既成事実作ればよかつた。さすが波多。

ああああ馬鹿だな私。こんなだから足軽か歩兵くらいにしかないんだな。

どうせ身体張るなら、ガチで女使えばよかつたのかなあ。

いや、引かれたら怖い。引かれるほどいつちやいそいだからな。

『いやーん酔っちゃったあー』を何度飲み会でシミュレーションしたよ？

瀬川さんがいると気が張って、三次会終わっても自分の部屋まで歩いて帰る強靱な精神と足腰が憎い！！

ベッドの上でバタバタ暴れていると、携帯が鳴った。

こんな時間にお母さんだろうかとベッドを出てバッグから携帯電話を取り出すと、ディスプレイに『瀬川さん』の文字。

思わず目を擦って二度見した。

また夢オチじゃないよね？

え、でも、何で？

混乱している間に電話が切れた。

「おおい！」

思わず携帯電話と自分にツツコミを入れ、急いで着信履歴からかけ直す。

『もしもし?』

いつものハリのある声ではない。ワントーン低いと更にエロい声しとんな。

「もしもし、お疲れ様です。倉橋です。すみませんお電話頂いたのに」

『お疲れ。あ、波多は?』

「いえ、いませんけど」

『そうなん。夜更けにすまんね』

「いえ、普段からならまだ早いほうですから大丈夫ですけど、どうしたんですか?」

『…………いや、すまん。何も無い。かけ間違えた』

「へ?」

『そういや俺、おまえに延長料金払ってなかったね』

「いえ、いりません。私も寝てしまいましたから」

『いや、そうもいかん』

「いいですって。サービスですサービス!」

返答がない。眠ってんのか? やけに静かだけど家なのかな?

「瀬川さん? すみません。私お邪魔してますよね?」

『何が?』

「え、だって…………デート中、かと…………?」

また沈黙を挟み、電波が悪いのかと携帯をチラ見したがバリッ。

「もしもし」

『別れた』

「……………はい?」

今のなに? 都合のいい幻聴?

『やけん、もう俺に彼女のこと聞くなよ。おらんけん』

「…………マジで、すか?」

『こんな嘘つくか』

「で、すか、ね?」

『……………』

ボソツと何か言ったが、聞き取れなかった。

「え？ すみません、電波悪くて聞こえませんでした」

「なんもない。かけまちがえてすまんね。別れたことは波多には言うなよ。じゃあな」

「えっ、あ。おやすみなさい」

「ん、おやすみ」

電話が切れて、単調な電子音が続く。

え？ なにこれ？ ドツキリ？

間違い電話？

もしかして今、チャンスの前髪掴み損ねた？ おいおい！ チャンス。おまえの前髪波平か！？

明日の冴子さんは予定を変更してお送りする感じ？

運命の歯車が動き出した？ 高速キリモミ回転かよ！

っーか、今の緊急膝枕要請だったんじゃ！？ おっと、落ち着け

マイ・マインド。すぐ飛躍するのがおまえのチャームポイントだ。

いや、飛躍ダメ、絶対。

「吉報じゃ！ 関を上げろ！！」

携帯を持ったままベッドに倒れ込む。

興奮が冷めない。っっーか冷めるわけない！！

ヤバイ！ 顔が緩む！

瀬川さんごめんなさい！ 飛んで火に入る夏の虫ったあ貴方のこつた！！

あああ。さっきのおやすみ録音すりゃよかった！！

ベッドで暴れていると喉が渴いた。

6缶パック二つ買ったのに残ってたっけ？ 買い置きチューハイでも飲むか。

瀬川さんには申し訳ないが祝杯をあげさせていただきます。

十話

瀬川さんには波多坊に言うなと口止めされましたけど、アイツは私の恋愛顧問。お伺いをたてなくてはな！　つか、もうむっちゃ喋りたい。なんだかもうワールドカップの熱狂も目じゃない。

履歴から波多の番号を押す。五回のコール後。

『はいよー、どーしたーん？』

普段どおりの波多の声。ちよつと安心している自分がいる。

「あ！　波多坊！　さつきはありがとう！　今いい！？」

『あ？　なんやハタ坊て。おれそんなふうに呼ばれよったん？　ま、いーけど、おれの千年灸は効いたとや？』

「うん！　効いた効いた。気をつける！　んでね聞いて聞いて！　これ聞いた後は聞かなかつたことにしてね！」

『あああ？　ホントに効いとると？　何なん？　そのテンション』

「効いたつてば！　それよりさつきね瀬川さんから電話あつてさ、あ。実際は間違い電話やつたんやけど、話の流れから、なんと、なんと！　彼女と別れたつて事実が判明しました！」

『……………ああ？』

ドスの利いた声の後、ふつかあああい溜息が聞こえた。

「もしもし？　波多？」

『……………あんたさ、今どこ？　タクシー？　まさか、家？』

「え。風呂あがりでチューハイ飲んでる。祝杯、みたい、な？……………」

え？」

『んで、おれに報連相？　高卒の就活か！』

「え、だつて言わずにおれんでさ」

『馬鹿め！　瀬川さんがド級のストレート投げてきとるのにどんだけ察しの悪い女なん！！　間違い電話とかもうバリバリ見え透いた嘘やんか！！　おれが倉はっさんやつたら押しの手で寝技に持ち込むわ！』

「えええええ？！ だつて、そんな、寝技つてあんだ！！」

「そんなんやけん鳶に油揚げなんよ！ コレ逃したら瀬川さんが別の女と結婚するかもしれんぞ。だいたいあんだ何？ この期に及んでいい部下でいますとかいうわけ？ 何夢見とんの？ いい子でいたいん？ それとも恋に恋するお嬢さん？ 十代かつつうの。三年近く片思いして自己満足が身に染みた？ 好きなのはカツコいい瀬川さんだけ？ 情けない瀬川さんは認めてやれんの？」

「んなことないわ！！ 瀬川さんやつたらなんでも美味しく召し上がれますう！！」

「じゃあ食つて来いや！！」

「ハイハイハイ、ちよつと待つてよ、肉しか食わない男子。行列のできるラーメンとはわけが違つやろ……。いきなりそういう風になるかはわからんやんか……」

「なら、瀬川さんの結婚式でブーケトスしてやるけん花嫁に顔面スバイク決めとけ」

「ヤダ！！」

「あーもう時間の無駄。早よ瀬川さんに電話して女見せて来い。都合のいい女になるか最後の女になるかは倉はつさん次第や。骨は拾つてやる。飲みにくらい付き合つちやるけん、特攻してこい。じゃあな」

電話が切られ、私の酔いは一気にさめた。

え、マジ？ これが最後のチャンス？ 駆り立てられ瀬川さんの番号を押す。

えつと、なんて言う？ こんばんは、倉橋冴子です。つて斜めの四十五度の角度から？ 資 堂使つてくれる？ 日本の女性は美しいって？ ようこそようこそ日本へつてか？

『倉橋？』

ぼーんと頭の中真っ白。クリステル無理！

「あ、あ、あの。こんばんは」

『おう。なんや』

「寝てました？」

『寝とつたら電話でとらん』

「ですよー。じゃなくて、あの、ちょっと考えたんですけど」「波多とだけど。私って一人じゃ偏ってて駄目になるんで。いや、そんなん今いい。」

「えーと、えーっと、しゅ、出張ひざまくらいがです？」

『は……？』

「お時間三十分ほどかかりますけど、今なら特別キャンペーン出張費サービスの時間無制限です」

「言いながらに冷や汗かいてる。今から化粧してタクシーで向ってギリかな。」

受話器の向こうで吹きだし笑いが聞えた。

『いいと？ そんなこと言って』

「え。あ、駄目でした？ でも、いくらなんでもこんなこと瀬川さんにしか言いませんよ？」

『おまえさー……、ま、いいや。いいたいこともあるけん頼むわ』

「え。いいんですか」

『営業かけてきたのおまえやろ』

きたあああああああ！！ (ファイ)！！ 物事ってこん

なにスムーズに運ぶの?! 天に愛されてんの?! 無法天に通ず?

「キャンセルとかエンジンとかなしですよ!？」

『デリヘルかっつうの』

「あ、それはちょっとテクニクに自信がないんで……」

『テクニク言うな、阿呆。さすがにそれは期待しとらん』

瀬川さんはブハツと吹きだし、笑いを押し殺しているようだ。教え込んでくれりゃいい仕事しますぜ。っていつたらドン引きだろうな。え、ちょ、期待って馬鹿。こっちは純度99.9%の下心だっつうの。

「じゃあ、準備したらすぐ向かいますんで寝ないで下さいよ? あ、

住所大濠でしたよね？」

『大濠公園まで出とくわ。正門前な』

「わかりました！　じゃあ、三十分、あ、四十分目安で。なるべく急ぎますから」

『近くなつたら電話くれ』

「了解です！！」

電話を切るなり、私は大慌てで先ず下着から着替えた。

こんなことなら可愛いパステルカラーのフリル買って置けばよかった。ごくシンプルなシャツにひびかない黒。表面に控えめなラメが散らばっている。谷間の辺りの小さなリボンの真ん中にスワロフスキーがついてるのがチャームポイント、の上下。

見られても恥ずかしくない部類に入るが、素っ気なくて萎えるかな？　いや、しゃあない。

服えーと、服どうしよう。ワンピースじゃ膝まくらするのにあざとい。あざとくていいのか？　ぬうう。あ、そうだタクシー呼んどこ。いつもお世話になるタクシー会社に電話すると十分で着くというので二十分後をお願いする。七分丈のタイトなパンツに斜ボダーの大きめのオフショルダーシャツ。デコルテ出しても紫外線は気にしなくていいし、ちよつとくらい色気ださせてもらいますぜ！！　夜のスキンケアを済ませた肌に急いで下地を塗り、ファンデを叩く。眉を足して、ゴールドブラウン系のシャドウに黒のアイラインを引いて、レッドのチーク、ルージュは偏光パールで艶と肌馴染みがいい云々が売文句の薄いレッド。

お気に入りのグッチオードパルファム？を空間にふってミストの下を潜る。

いつもは一つに纏めている髪に丁寧に櫛を通し、広がらないようにスタイリング剤を馴染ませ、もう一度櫛を通す。くっそー巻いてる時間ない！

あれ？　夜用美容液のおかげか、いつもよりファンデの乗りがいい……？

おつと研究してる場合じゃない。こうしちゃいられないんだ。時間はあるという間に二十分経ってしまいそうだ。

どうなるんだろう。やっぱり一戦交えちゃう系!? ストラップミニールを履きながら緊張してきた。白い小振りのレザーバッグには携帯電話と財布とハンカチちり紙、そしてルージユ。

よっしゃ、出陣!! いざ本能児の変態! 心臓バクバク。明智光秀の三日天下になりませんように! でも明智つつあん愛妻家の知将だけどな。ごめーん。

エントランスに行くとき、ちょうどタクシーも到着していた。

ついに、行動ですよ。冴子さん! 三年に及ぶ片思いにレポリユーション!!!

あ、トイレ行つときゃよかったかな。ぶるつときた身震いはたぶん武者震いということぞ。

十一話

大濠公園周辺は大通りに面しているところでもすでに人影は少ない。

薬院六つ角を過ぎた辺りで電話をかけ、地下鉄空港線大濠公園駅付近で降りることを告げた。

心臓はバクバク胸から飛び出しそうなのに、額から冷や汗が出ている。平静を装ってみるものの、ちよつと気を抜くと身体が震えてくる。

完全プライベートでお会いできる日がくるなんて、今、この瞬間に生まれてきた喜びを感じてますよ、おかあさん！！ ふしだらな娘でごめんねおとうさん！！ マジ感謝！！ だから許してちょんまげ！！

タクシーが着くとお釣りももどかしく、おつりはいりませんなんか言っちゃう始末だ。

ドアの開閉音で、禁止されている路上喫煙をしている人影がこちらを向いた。

普段後ろに撫でつけている髪を下ろし、少し目にかかるくらいの長さになっている。

垣間見える張った額とかシャープで高い鼻梁とかそんな萌える横顔の黒目だけで私を確認すると、ちよつと情けない笑顔を作った。

「お待たせしました」

瀬川さんにかげより会釈をする。

「わざわざすまんね」

携帯灰皿で煙草をもみ消すと、カーゴパンツのポケットにしまいこみ誘導するように歩き始めた。

黒いVネックのコットンシャツはなかなか襟がしっかりしているタイプで、アクセサリは喉仏と鎖骨ですか、わかります。と舌な

めずりしそうになる。

もしかして、もしかしなくても御宅拝見ですかと期待して連れられたのは、イタリアン・ダイニングバー。

店内には静かなムードミュージックが流れている。夜更けに人は少なく、カップルと女性二人組みが静かにアルコールを愉しんでいた。

店員に招かれ、瀬川さんは奥まったところのテーブル席を選ぶ。

「まあ、好きなもんどろぞ。なに飲む？」

そう促され、手渡されたメニューをみるが気が気じゃない。だいぶ肩透かしを食らっているので、メニューなんて頭に入らない。

「じゃあ、このエストにします」

ホントはエスト・エスト・エストって書いてあるが三回も言うのは面倒なので簡略化する。

「じゃあ、これ一つ。あとコーヒーお願いします」

店員さんは畏まりましたと会釈をすると軽やかな足取りでカウンターに向った。

「瀬川さん飲まないんですか？」

「コーヒーでいい。それより腹減つとらん？」

「いえ大丈夫です」

いつの間にか喉がカラカラだった。冷たい白ワインをグツと飲み干したい。

「そっか。悪かったね。来てもらって」

おしぼりで手を拭き、再び煙草を取り出す。

「自分で行きたいと思って来ましたからいいんです。瀬川さんのほうこそお食事は？」

「夕方食った」

「お腹空いてますか？ ピザなら一緒にできますよ」

「いい。腹減つとらんし」

「そうですね」

ちよっと笑って見せたが、瀬川さんは煙草を玩びながらどこかぎ

「こないままだ。」

「お待たせ致しました」

澄んだ薄金色の液体が入ったグラスと白い陶器のソーサーセットが中央に置かれる。

私はコーヒーを瀬川さんの前に置いて、自分もグラスを持った。

「お疲れ様です」

「ん、倉橋も」

軽くかざして一気に飲み干す。声が出そうなのを我慢。

「ふう」

「ワイン一気かい」

「すごく喉渴いちゃってて。すんまつせん」

軽く頭を下げると、瀬川さんは微かに笑った。

「いや、いいよ。倉橋らしくて。飲む？ 同じのでいいとや？」

色気。色気。いでよフェロモン！！ 頷くと瀬川さんは同じものをもう一杯注文してくれた。

「実はさ、加奈子が元彼とヨリ戻したんよね。二ヶ月前から連絡とって会いよつたみたい」

いきなり本題を出されて思考回路がフライング。切れそうなタコ糸を巻き巻き。おかわりが運ばれグラスが交換された。店員さんが去るのを待つて、声を潜める。

「加奈子ちゃんって？ 彼女？ ですよ？ 浮気されてたってことですか」

「そう。まあ、気づいててほつといたんやけど」

何てことない風にいうと、コーヒーマップに口をつける。

「うえええ？ なんでそんなことできるんですか？ 大人術ですか？ 私だつたら無理です」

「うん。大人術とかそんなんじゃないやなくて、俺も似たようなもんやつたけん」

「え、ちょ、瀬川さんも浮気してたんですか？ なんなんですか？ 感性が平安貴族なんですか？」

「いや、違つつて。俺には前から気になる相手がおつたんやけど、相手にされとらんかつたんよ?」

「ザツと血の気が引く。私何のためにここにいるの? 言葉が出なくて酸欠の金魚みたいに口を動かしていたら、笑われた。」

「めっちゃくちゃ仕事熱心な部下なんやけど、おまえ心当たりない?」
「も、もしかして……、は、は、波多?」

あわあわしていると、瀬川さんは両手で顔を覆って深い落胆のポーズを見せた。

「おまえ、なに? ポケスキルでも磨きよると? おまえしかおらんやろーが! 信じられん。俺のこの襲いかかる恥ずかしさはどうしてくれるん?」

「え」

由香ちゃんとかあゆりんとかも浮かんでたんだけど、あゆりん事務だし由香ちゃん有力か? みたいに考えていた。

「お前が膝枕してくれたときの俺の喜び返せ」

「そんなこといわれたって返せませんよ!! 私がどれだけ幸せだったか! だいたい、とつとと恋人作ったの瀬川さんのほうじゃないですか!」

「ちよ、おまえ声でかい」

ハツと口を塞ぐが、カウンター席の女子のメンチにぶつかった。すんまつせん。

「それならそうともつと早くに言ってくれたら私、二つ返事で瀬川さんと付き合いましたよ」

「いや、そう言われても、俺だって部下にそんなこと軽々しく言えん。んで、悩んでたら、まあ、その、いつも使いよったファミレスの女の子に告白されて、そう、こうなったわけ」

「はあああ? もうなんなんですかコレだから色男は。そっちの方が信じられないですよ。私の空白の約三年間ってなんなんですか。惚れた男は尻軽でしたとかもう仏壇のお婆ちゃんに顔向けできないじゃないですか」

「ちょ、仏壇とか出すなや。ご挨拶できんやんか」

「だってなにそれって感じですよ。もうぶつちやけ今天国逝きそうなんですけど、逝くに逝けないです。そりゃ、私だって今の職場の雰囲気壊したくなくて我慢してましたけど、瀬川さんも我慢してくれたらよかったです。馬鹿尻軽やりチンおまえのとーちやんだーンデイ」

「あはははは！ くだらねえ」

瀬川さんは腹を抱えて笑い、目をこすりながら顔を上げた。

「言いたい放題やな。最後だけ受け取っとくわ」

「お釣りはいりませんから」

私は二杯目も一気に呷る。

「でもさ、結婚とか考えたときにおまえの顔が浮かんだっちゃんね」
「ブツと思わずワインを吹いてむせてしまった。」

「うわー、汚え。歓迎会の席で松本に胸鷲掴みにされたときも吹いたよな、おまえ。あん時は日本酒やったっけ」

「松本『課長』です。ちなみに芋のお湯割でしたー」

ハンカチで口元と胸元を拭いながら答える。瀬川さんがおしぼりでテーブルを拭いてくれた。

「ま。正直、いつ別れようか考えとったけんタイミングよかった」

「狡か男ですね！」

「そうぜ。俺は狡い男やけんな。確信持つまで動きたくないんよ」

「信用できませんね。いやらしい」

「そらきついな。じゃあ、契約しようや」

「契約は簡単に取れないってこと、瀬川さんが一番身に染みてご存知なんじゃないですか？」

「俺を誰やと思っとーとや？ 取るつつたら絶対取るぜ」

大胆不敵に笑う。この人が手に入るならもう全部水に流している。

「確信してるんでしょう？ 人誑しの敏腕営業係長様」

「おう。膝枕の時のおまえな、可愛かった」

「ちょ！ なっ！ なんですかいきなり！」

一人掛けの大きなソファじゃなかったらひっくり返っていたかも知れない。

「顔は赤いし身体は固いし震えてるし」

いかかわしい視線に舐めあげられて過敏症になった肌が粟立つ。

この人、獣や！ ムツゴロウ無理！ 僭越ながら倉橋冴子、餌食に甘んじます。

「本当、彼女作ったの後悔した。最初からおまえのこと口説きやよかったって思ったよ」

「よかったですね。私がしぶとい女で」

「いいね、泣かせるわ」

泣きたいのはこっちだ。こんなに殺し文句並べ立てられて喜びで窒息しそう。

「おまえは仕事と家庭ならどっち選ぶ？」

「もし、叶うなら引継ぎできる子が出来るまで仕事続けたいです。

それから家庭に入ります。でもその質問気が早くないですか？」

「事は早めに進めとかな。おまえには悪いばってん見合いしたと思つてあきらめてもらう」

「私と結婚するつもりですか？ 見合いってこれ？」

「倉橋冴子さん。結婚を前提に俺とお付き合いしてくれませんかね？」

「ええええ。見積書と契約書お願いします」

咄嗟に出た言葉に、瀬川さんは苦笑する。

「じゃあ、今週末までに必要な書類と証明できるものを用意いたしますんで、日曜日の十二時にお会いできますか？」

思つてもなかった展開に涙が出てきた。堪え切れそうになかったので目頭を指で押さえ必死で食い止める。

「できます」

辛うじて返答すると手が差し出された。

私はその手を握り返すと、さらに強く握り返された。

「では、商談はここまでということ。お送りします」

「帰すんですか？」

「今日のところはな。明日も早いけん帰るぞ」

「膝枕は？」

「これからいくらでもしてもらおう。おまえの膝枕独占権は俺もんやけんな」

伝票を取ると、瀬川さんはさっさとレジに向ってしまった。

ここまでできて物足りなさを感じているのは贅沢かしら。絶対後でキスしてやる。決心して何食わぬ顔で瀬川さんの後を追った。

十一話（後書き）

まだ続けたいとも思いましたが、あんまりやると長くなるのでぶった切りました。最後までお付き合いくださった方々、感想を下さった方々、お気に入り登録してくださった方、急展開終了で申し訳ありません。

色々つつこみどころ満載ですがご了承下さい。もしかしたらまたひよっこり番外編などやるかもしれません。ご要望などありましたら是非。できる限り応えさせていただきますと思います。

それでは、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8770v/>

限定！専属！契約？膝まくら社員。

2011年8月27日03時36分発行